

バートランド・ラッセルの言語観

大野 真¹

本論では、イギリスの数学者・哲学者であるバートランド・ラッセル (Bertrand Russell, 1872年 - 1970年) の言語に対する考え方を扱う。

ラッセルは長い生涯において膨大な量の著作を残し、その扱った分野も専門の数学や哲学以外に、科学基礎論、心理学、政治学、時事問題、教育論、人生論など多方面にわたる。その英文は簡潔で明晰かつユーモアがあり、名文とされている。(なお、ラッセルの書いた様々な随筆は、模範的な英文として、以前には英語読解力養成のテキストに頻繁に取り上げられていた。)

ラッセルの多方面の仕事の中でとりわけ重要なのは、記号論理学における業績であろう。『数学の原理』(*Principles of Mathematics*, 1903年) やアルフレッド・ノース・ホワイトヘッドとの共著『数学原理』(*Principia Mathematica*, 1910 - 13年) といった著作において、ラッセルは当時最先端の記号論理学を用いて、集合や数などの数学的諸概念を精密に分析し、基礎づけている。

ラッセルは自ら作り上げた記号論理学の考えを数学的概念の分析以外にも様々な分野に応用したが、その中でもとりわけ言語の分析が注目される。とくに、「指示について」(“On Denoting”、1905年) で提唱された「記述の理論」(the theory of description) は、記号論理学による言語の分析として画期的なものである。そこでは、英語の定冠詞“the”の分析といった具体的な例を扱いつつ、人間の知識と言語による記述の関連といった広汎な主題に関しての問題提起がなされているのである。

その後もラッセルは言語の問題に関する考察を続け、その成果は『意味と真実性の探求』(*An Inquiry into Meaning and Truth*, 1940年) にまとめられた。

本論では、ラッセルの言語に対する考え方を「記述の理論」の発展としてとらえ、「指示について」と『意味と真実性の探求』をもとにして、その言語観の変遷を辿っていきたい。また、ラッセルの言語観を彼の哲学全体の中で位置づけるために、晩年の著作『私の哲学の発展』(*My Philosophical Development*, 1959年) も適宜参照する。この本は、ラッセルが自らの哲学思想の発展を述べたものである。(なお、ラッセルの著作からの引用文は拙訳。)

1. 「記述の理論」

「指示について」で提唱された「記述の理論」は、ラッセルの言語に関する理論の出発点と見なされるべきものである。「指示について」においてまず注目されるのは、「直接的な認知」(immediate acquaintance) と「記述」(description) による知識との対比である。「例えば、一定の瞬間における太陽系の質量の中心が一定の地点にあることを我々は知っていて、それについての数多くの命題を確認することができる。しかし、我々はこの地点に関する直接的な認知をもたず、それは記述によってのみ我々に知られる」(「指示について」41、以下の引用では「指示」と略記)。上記の引用で例として挙げられている「太陽系の質量の中心」については、我々が直接的な経験として見知ったものではなく、当時の天文学の文献中の記述を読むなどして得た知識であることが明らかであろう。

¹薬学部第2英語研究室

さらに、ラッセルは、哲学的な分析を施してみると、いわゆる客観的な「物体」や他人の心なども、直接的に見知っているのではなく、それらの特性を述べた記述による知識であることを指摘する。

「ここで、物体(物理学で生じるような意味での物体)や他者の心のような事物は、記述句(denoting phrases)によってのみ知られる。つまり、我々はそれらを見知^てて(acquainted) いるのではなく、あれこれの特性をもつものとして知っているのである」(「指示」56)。

ラッセルの「記述の理論」を用いると、様々な事物に関する我々の知が、その事物の特性を述べた記述の集合へと分析・分解されていく。いわば、現代風に言うと、データベース化されていくのだ。

その際にラッセルが活用するのは、「命題関数」(propositional function) という着想である。例えば、「ソクラテスは人間である」という命題の「ソクラテス」の部分に変数 x を導入することによって、「 x は人間である」という命題関数が得られる。いわば、個別の命題に変数 x を導入して関数化し、一般化するのである。

命題関数の着想はラッセルの記号論理学の基盤を成すものであり、例えば、ホワイトヘッドとの共著『数学原理』においては、命題関数を基にして集合や数などの数学的概念が定義・展開されている。

「指示について」において、とくに注目されるのは、英語の定冠詞“the”によって指示される対象の分析である。例えば、「チャールズ2世の父」(the father of Charles II) が意味することを変数 x や y を用いた命題関数を用いて論理的に表現し直すならば、「もしも y がチャールズ2世を生んだのなら、常に y と同一であるような x が存在する」ということになる(「指示」44-45、ただし、ラッセルによる表記を分かりやすく書き換えた)。

上記の例での要点としては、チャールズ2世を生んだ x なるものが存在し、かつ、それが唯一であることだ。英語の定冠詞“the”を含む表現において重要な2つの条件は、存在性と唯一性である^{注1}。(後の『数学原理』では、14節の「記述」(Descriptions)と題された節において、“the”における存在性と唯一性という条件が、記号論理学を用いてさらに明確に表されている。)

定冠詞“the”を用いた「記述句」の例として、ラッセルがよく引き合いに出すのは、『『ウェイヴァリー』の作者』(the author of *Waverley*) という例である。『ウェイヴァリー』とは、英国の小説家ウォルター・スコットが1814年に書いた長編小説のことだ。歴史上の事実として、小説『ウェイヴァリー』を書いたのはウォルター・スコットであるから、『『ウェイヴァリー』の作者』という記述句と「ウォルター・スコット」という固有名詞とは同じであると思うかもしれない^{注2}。しかし、ラッセルは記述句と固有名詞の言語上の機能の相違に注目し、記述句は文の一部であり、それ自身としては意義をもたないという文脈主義的な見解を打ち出す。「私が提唱する見解によると、記述句は本質的に文の一部であり、ほとんどの単独の単語(single words)のようにそれ自身として意義(significance)をもつのでは全くない」(「指示」51)。このラッセルの見解を発展させると、固有名詞は文とは独立した意味を持つが、記述句の意味は文に応じて変わってくる、ということになるであろう。例えば、「エイブラハム・リンカーン」という固有名詞は文とは独立した外界の存在物を指すのであるが、「当時のアメリカの大統領」という記述句は、それが用いられる文脈によって、リンカーンやジェファソンなど、指示する対象が異なり、その意味も変わってくる。記述句は文の中

でこそ意義を持つ。記述句の意義は経験に限定されず、文（あるいは文の集合としてのテキスト）によって与えられるのである。

我々が経験によって直接に見知ることのできる事柄はごく限られているが、言語による記述を用いることによって、直接的な経験を越えた様々な事物を描くことができる。

例えば、「太陽系の質量の中心」のような科学的事実や「ソクラテス」のような歴史的な人物についての記述は、我々が直接見知っているのではない客観的な事実についての知識を表している。例を挙げると、筆者はソクラテスのことを直接見知っているわけではないが、「ギリシャ最高の倫理的哲学者」かつ「プラトンの恩師」かつ「無知の知を説いた人物」…などといった様々な記述句の複合体としてソクラテスのことを理解しているのである。

さらに、ラッセルの記述の理論は、いわゆる非 - 存在物を扱うこともできる。『丸い四角』『2より他の偶数の素数』『アポローン（筆者注：ギリシャ神話の太陽神）』『ハムレット』などのような非 - 存在物 (non-entities) の全領域を満足のいくように扱うことが今や可能である。これら全ては、いかなるものをも指示 (denote) しない記述句なのだ（「指示」54）。つまり、これら非 - 存在物についての記述句は、それが指示する現実世界の対応物が存在しないため、定冠詞“the”の満たすべき2つの条件である存在性と唯一性の中で、存在性の条件を満たしていないのである。例えば、「丸い四角」(the round square) という非 - 存在物についての記述句は、存在という条件を満たしていないため、「丸い四角」の存在を前提条件としていると解釈した場合の「丸い四角は丸い」という命題は偽な命題となる（「指示」54）。しかし、「丸い四角」に対応するものは現実世界に存在しないが、「丸い四角」という記述句自体は文（テキスト）の中で意義を持つ、と言えるだろう。

上記の「丸い四角」という非 - 存在物は、それ自体の特性が矛盾をはらんでいるために存在しえないのであるが、筆者のような文学研究者にとって、「ハムレット」のような文学作品の登場人物は、とりわけ興味深い非 - 存在物の例である。

例えば、20世紀アメリカ南部文学の代表的作家であるウィリアム・フォークナーを例にとり、その最高傑作とされる長編小説『アブサロム、アブサロム！』の主人公トマス・サトペンのことを考えてみよう。サトペンについての我々の知識は直接知ではなく、記述による知識である。サトペンについてのデータはテキスト内の様々な記述を通して読者に与えられ、我々はそれらの記述を通してサトペンの人物像を作り上げる。具体例を挙げると、或る日突然に南部の町ジェファソンに出現して大邸宅を建設し、名家の女性と結婚して一男一女をもうけるが、やがて人種問題をきっかけとして破滅していく男、云々といった具合だ。これらの記述による特性を唯一満たすのがサトペンである。

サトペンは想像上の人物であるから、現実の世界には存在しない。しかし、サトペンについての様々な記述は『アブサロム、アブサロム！』中の数多くの文の集合（テキスト）において文脈上の意義を持つため、サトペンはいわば『アブサロム、アブサロム！』という作品世界の中に存在しているのである。さらに、『アブサロム、アブサロム！』という作品世界は、南北戦争前後のアメリカ南部社会をモデルにして構築されており、現実世界との相似性 (similarity) を持っている。我々は、想像上の人物であるサトペンについて考察することを通じて、現実の南部の社会における人種問題や人間心理の深層を逆照射することができるのだ。

このようにラッセルが「記述の理論」において想像上の非-存在物を扱えるようにしたことは、言語学的な観点からも重要である。それというのも、人間の言語は、現実の世界だけではなく、一角獣や怪鳥の鶴（ぬえ）のような想像上の事物も扱うことができるのが特徴だからだ。言語学者の今井邦彦は以下のように述べている。「一般に人間は常に現実の世界だけを思考の対象としているわけではない。したがって言語表現の意味を考える場合、現実の世界だけでなく、さまざまな**可能世界** (possible worlds) も視野に入れる必要がある。鶴は現実の世界には存在しないが、この怪鳥が存在する可能世界では、『頭がサル、胴がタヌキ、…』という概念を満足する個体のすべてが『鶴』の意味ということになるわけである」(今井 28 - 29)。このように、直接的な経験の範囲内の時間や空間を超えて、鶴のような存在しないものに名前をつけたり、あるいは(ラッセルの記述の理論でも例に出た)「丸い四角」のように矛盾した表現を作り出す能力を持つところに、人間の言語の特徴である「超越性」が表れていると今井は指摘する(今井 4-5)。

人間の言語の超越性という特徴を利用することにより、我々は自らの狭い経験を超えた様々な事物を言語によって描き出すことが可能になる。ラッセルの哲学の基本的な立場として、「事実是一般的に経験から独立」しており、「経験は宇宙の中の非常に小さな部分の大変に限られたかつ宇宙的には些細な局面に過ぎない」という考え方がある(『私の哲学の発展』5章、p. 50)。しかし、言語による記述という手段を通じて、我々は各々の狭い私的経験を越えて、客観的事実(科学的事実や歴史的事実)を述べたり、さらには想像上の世界も描き出すことが可能になるのである。

ラッセルの「記述の理論」は人間の言語の持つ超越性と自由な創造的性格を生かした理論なのだ。

2. 言語の階層とタイプ

「指示について」(1905年)で提唱された「記述の理論」を出発点にして、ラッセルはその後に言語に対する考察をさらに深め、それらの成果を『意味と真実性の探求』(1940年、引用では『探求』と略記)において、まとまった形で提示した。

この著作においてまず注目されるのは、言語に対して階層的区分を導入していることである。ラッセルの記号論理学上の大きな業績として、集合論における自己言及的なパラドクスを回避するためにタイプ理論を提唱したことが挙げられるが、言語においてもタイプ理論的な階層の区分を設けるのだ。「言語についての論理学的研究から最も明瞭に出てきた成果の一つとして、言語の階層(a hierarchy of languages)が存在するに違いないということ、そして、或る一定の言語における言明に適用されるものとしての『真』や『偽』といった単語は、それ自体はより高い階層(higher order)の言語に属する単語であるということだ」(『探求』序章、p. 19)。

ラッセルは、最も低いタイプの言語を「対象-言語」(object-language)あるいは「1次的言語」(primary language)と呼ぶ。1次的な「対象-言語」においては、あらゆる単語は感覚的な一つの対象ないしそうした感覚的な対象の集合を「指示」(denote)あるいは「意味」(mean)する。こうした1次的な「対象-言語」から次のタイプの「2次的な言語」(secondary language)に進むには、「あるいは」(or)や「～でない」(not)や「或る」(some)や「全ての」(all)といった「論理語」(logical words)と、対象-言語における文に適用される「真」(true)や「偽」(false)という単語を加える(『探求』序章、p. 19-p. 20)。つまり、直接的な経験と結びついた感覚的な対象を指

示する1次的な対象 - 言語から出発し、それに加えて普遍的な論理語を導入していくことで、一般化・普遍化して客観的な世界を描ける言語を構築していくというのが、ラッセルの構想である。

3. 私的で現在的な言語—経験との最小限の絆

本論考の前章では、感覚的な対象から出発する言語の階層説を紹介したが、『意味と真実性の探求』においては、人称や時間に注目した、別の観点からの言語の階層説も提唱されている。

まず、ラッセルは、1人称的な現在である「私 - 現在」(I-now)を言語の出発点とする。そして、いわゆる「私」(I)という語も「私 - 現在」から派生したものとして考える。『私』という単語は、一定の期間の時間を通じて続くような何かに適用されるものであるため、一定の因果的關係によって『私 - 現在』に関係づけられるような一連の出来事として、『私 - 現在』から派生するに違いない(『探求』第7章、p. 113-p. 114)。なお、「私—現在」は指示代名詞の「これ」(this)と密接な関連があり、「私は～である」(I am)という句は、「これは～である」(this is)という句と常に相互に置き換え可能である(『探求』7章、p. 114)。

ラッセルにとって、知識の理論の出発点は、こうした「私 - 現在」的な文である。「私は『これは赤である』(this is red)とか『それは明るい』(that is bright)とか『私 - 現在は熱い』(I-now am hot)といった特定の出来事(particular occurrences)についての文から始める」(『探求』22章、p. 311)。以上のラッセルの考え方は、話し手に関連した人称や時間に注目して知識の理論を考えている点で非常に興味深い。

こうした「私 - 現在」的な文は、言語と経験とを結ぶ最小限の絆であると言えるだろう。私的世界の直接的経験から出発して、推論を働かせながら、徐々に客観的な公的世界へと知識を広げていくのである。「知識の理論は全て、『人類は何を知っているのか?』(what does mankind know?)からではなく、「私は何を知っているのか?」(what do I know?)から出発しなければならない」(『探求』10章、p. 143)。

ラッセルにとって、私的経験こそが知識の出発点であり、公的な知識はそこからの構築物なのである。「だが公的知識(public knowledge)は構築物(a construction)であり、私的知識(private knowledges)の総計未満のものしか含んでいない」(『探求』10章、p. 143)。こうしたラッセルの知識の理論の前提となる世界観は、「…我々が推測なしで知覚するものの全体は、我々の私的世界(private world)に属する」という見解であろう(『私の哲学の発展』2章、p. 20)。私的経験を出発点とする点で、ラッセルの見解はイギリス経験論の哲学者ジョージ・バークリー(George Berkeley)の考え方と一致するが、ラッセルは私的知識から公的知識を構築するために、記号論理学という、バークリーにはなかった新しい手段を持っていたのである。

4. 言語と事実との対応

ラッセルの言語観の基本的な前提は、言語と言語外のものとの関係を常に考慮することである。『私の哲学の発展』において、ラッセルは以下のように言う。「哲学者や本好きの人は一般的に言葉によって支配された生活を送る傾向があり、言葉の本質的な機能は事実(facts)と何らかの関連(connection)を持つこと、そして事実は一般的に非 - 言語的(non-linguistic)なものであるこ

とを忘れてしまいさえする傾向がある」(『私の哲学の発展』13章、p. 110)。ラッセルの考えによると、言語と言語外のものとの関係において「意味」(meaning)が生じるのである。「言語について本質的なことは、言語が意味を持つこと—すなわち、言語がそれ自身以外の(一般的に非-言語的な)何かと関係を持つことである」(『私の哲学の発展』1章、p. 11)。

しかし、言語と言語外のものとの対応は単純とは限らず、論理語が導入されていくと複雑性を増す。「こうした対応 (correspondence) の複雑さは、『あるいは』(or) や『～ではない』(not) や『全ての』(all) や『何らかの』(some) のような論理語の導入とともに増していく」(『私の哲学の発展』15章、p. 140)。例えば、「全ての」(all) に相当するものは世界には存在しないので、単純な検証は難しい。『全ての人の死』(all men's deaths) というものは世界には存在しないし、それゆえ『全ての人は死すべきものである』(all men are mortal) についての1つの検証 (one verifier) は存在しない」(『探求』18章、p. 256)。論理語は個人的経験を越えた客観的な知を構築する際に必要なものだが、経験を越えたものであるがゆえに、言語外の実事との対応を複雑にしているのである。

なお、或る命題の真偽は言語外の実事との対応如何によって決まるのであるが、ラッセルは、「真である」(true) を「検証可能である」(verifiable) よりも広い概念としてとらえている。『真である』は『検証可能である』よりも広い概念であり、実際、検証可能性 (verifiability) によっては定義されないと提案したい」(『探求』16章、p. 227)。それというのも、検証可能性は私的経験に束縛されたものだからだ。「私が『私は暑い』(I am hot) というときは、私はそれを検証するもの (the verifier) を認知していて、それは私の熱さ (my hotness) である。私が『あなたは暑い』(you are hot) あるいは『太陽は暑い』(the sun is hot) というときには、私はそれを検証するものを認知していない」(『探求』16章、p. 232)。「あなたは暑い」や「太陽は暑い」という私的経験を越えた実事との対応を考える際には、論理語が必要になってくる。さらに、実事 (fact) を越えた想像 (fiction) の世界を言語で描く場合には、(ラッセル自身の説ではないが、ラッセルの理論を発展させると、) 現実的な世界を越えた「可能世界」(possible worlds) との対応を考える必要も出てくるだろう^{注3}。

5. 話し手の状態の表現—言語の役割をより広く考える。

『意味と真実性の探求』で注目されるのは、言語の役割として、実事との対応と指示以外のものも扱っていることだ。第14章「表現としての言語」の冒頭で、言語のもつ3つの役割が挙げられている。「言語は3つの目的に役立つ。(1) 実事を指示すること (to indicate facts)、(2) 話し手の状態を表現すること (to express the state of the speaker)、(3) 聞き手の状態を変えること (to alter the state of the hearer)」(『探求』14章、p. 204)。この見方に応じて、単語も「実事を指示するために必要な単語」と「話し手の状態を表現するためにのみ必要な単語」とに分類され、論理語は後者に属するとされる(『探求』14章、p. 212)^{注4}。例えば、論理語の「あるいは」(or) は、「ちゅうちょ」(hesitation) という状態を表す語としてとらえ直されるのだ(『探求』14章、p. 210)。

こうした観点から注目されるのは、「信じる」(believe) という動詞の扱い方である。

ラッセルは、命題“p”は2通りの異なったやり方で生じうると言う。すなわち、(a) 指示

(indication) と表現 (expression) の両方に関連する場合、と (b) 表現のみが関連する場合、である。「文がそれ自身として一つの主張 (an assertion) として生じる場合には、(a) である。一方、『A は p を信じる』(A believes p) という場合には、(b) である。なぜなら、我々が主張している出来事 (occurrence) は、 p の真偽に全く関わりなく描かれうるからである」(『探求』19 章、p. 271)。例えば、「A は p を信じる」の A を「太郎」に、 p を「ヒト型の生物が火星に住んでいた」という命題だとしてみよう。「ヒト型の生物が火星に住んでいた」という命題の真偽は不明であり、おそらく偽なのかもしれないが、その真偽に関わりなく、「太郎はヒト型の生物が火星に住んでいたと信じている」という文は、この命題に対する太郎の信念という態度を表現するものとして成立するのである。

上記のように、「事実の指示」だけではなく「話し手の状態の表現」も考慮したラッセルの言語観は、言語学における命題とモダリティという考え方と共振している。言語学者の仁田義雄は、文の基本的な意味 - 統語的構造は、少なくとも、命題 (proposition、言表事態) とモダリティ (modality、言表態度) という 2 つの層から成立していると主張する。「命題とは、話し手が外界や内面世界との関係において描き取ったひとまとまりの事態、文の意味内容のうち客体化・対象化された出来事や事柄を表した部分である。それに対して、モダリティとは、命題をめぐる話し手の捉え方、および、それらについての話し手の発話・伝達的態度のあり方を表した部分である」(仁田 11 - 12)。そして、日本語の文の基本的な意味 - 統語的構造は、モダリティ (的意味) が命題 (的意味) を包み込む、というあり方を取って成り立っているという (仁田 12)。

日本語に限らず英語においても、実際のコミュニケーションでは、話し手の発話・伝達的態度が非常に重要なので、『意味と真実性の探求』におけるラッセルの言語観はその点も考慮したものだと思う。

6. 総括

ラッセルの「記述の理論」は、我々が経験によって直接認知するのではない客観的事実や想像上の事物についても言語によって描きうることを理論的に基礎づけている。それは、直接的経験を越えた超越性や自由な創造性といった人間言語の特徴と結びついているのである。

『意味と真実性の探求』では、言語と経験との関係が再考される。ラッセルは言語の階層を提唱し、その階層においては、感覚的な対象を指示する 1 次的な言語から出発し、それに論理語を加えていくことで高次の言語へと進む。また、言語の階層を話し手の人称や時間という別の角度から考えてみると、「私 - 現在」的な文を知識の理論の出発点とする見解が提示される。こうした言語の階層性を考慮して、言語と事実との対応 (真か偽か) の複雑性も、あらためて再検討されることになる。

さらに、『意味と真実性の探求』では、言語の役割として、事実を指示すること以外に、話し手の状態を表現したり、聞き手の状態を変化させたりすることも取り扱っており、実際のコミュニケーションに即した言語観を提示している。

新しい記号論理学を背景としたラッセルの言語観は、直接的経験を越えた超越性や自由な創造性といった人間言語の特徴を強調するとともに、その上で、イギリス経験論の伝統に沿って、言語と

経験の関係、言語と事実との対応を再検討し、さらに、話し手や聞き手の状態の表現や変化といった実際のコミュニケーションの現場での言語の役割も考慮したものであると言えよう。

【注】

1. 英語の用法では、“the cats”のように、複数形の名詞に定冠詞がつく例もあるのだが、ここでは単数形の名詞句に議論を限定する。なお、複数の対象を扱う論理については、飯田隆『日本語と論理—哲学者、その謎に挑む』（NHK出版、2019年）に詳しい。
2. 『『ウェイヴァリー』の作者』という記述句と「(ウォルター・)スコット」という固有名詞は同じではない。仮に同じであれば、「スコットは『ウェイヴァリー』の作者であった」という文は「スコットはスコットであった」という文と等しいことになってしまうが、この2つの文の意味は明らかに異なる。「スコットは『ウェイヴァリー』の作者であった」という文の意味を記述の理論を用いて分析すれば、「唯一人の存在 (entity) が『ウェイヴァリー』を書き、そしてスコットはその唯一人と同一であった」という意味になる（「指示」51）。
3. なお、「可能世界」との対応で意味を考察する意味論としては、アメリカの数学者・論理学者のリチャード・モンタギュー（1930年 - 1971年）が提唱したモンタギュー文法がある。ただし、「可能世界」における存在を認めると、存在物が無制限に増えてしまう恐れもある。
4. （3）の「聞き手の状態を変えること」は、その都度のコミュニケーションの状況の結果として伴うことなので、単語の元来の役割には挙げられていないのであろう。

【引用文献】

- Russell, Bertrand. *An Inquiry into Meaning and Truth*. 1940. London: Unwin, 1985.
- . *My Philosophical Development*. 1959. London: Unwin, 1988.
- . “On Denoting.” *Logic and Knowledge: Essays 1901-1950*. Ed. Robert Charles Marsh. London: Unwin Hyman, 1988. 39-56.
- 今井邦彦「言語とは何か」（松本裕治・今井邦彦・田窪行則・橋田浩一・郡司隆男『言語の科学1 言語の科学入門』第1章、岩波書店、2004年第1刷、2019年オンデマンド版）
- 仁田義雄「文法とは何か」（益岡隆志・仁田義雄・郡司隆男・金水敏『言語の科学5 文法』第1章、岩波書店、2004年第1刷、2019年オンデマンド版）